

# 海外舞踊文献紹介

はじめに

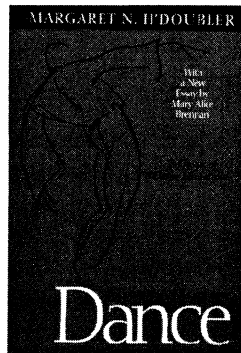
舞踊教育関連の海外文献を紹介するにあたり、以下の3つの視点からその内容を捉える。まず第1は舞踊の普遍的価値を論じ、学校教育における舞踊実践の意義を説くもの、すなわち舞踊教育の原論と理想あるいは実践を述べている学術書である。第2はこの原論を踏まえ、現場において実践のヒントを与えてくれるガイドブックを、そして第3として、学校という枠を超えて舞踊の指導が行なわれる場、たとえば舞踊学校や稽古場等における指導のあり方を問う書である。近年に出版されたものを中心に、筆者の判断で選択した。

## 1. 原論—‘舞踊とは何か’‘舞踊教育とは何か’

### (1) 舞踊の普遍的価値

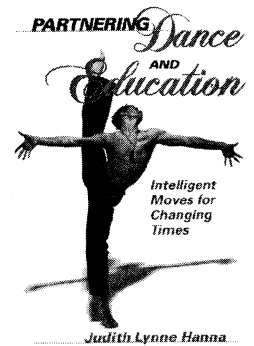
Margaret N.H'Doubler, *Dance: A Creative Art Experience*, 168p., Madison Wisconsin, The University of Wisconsin Press, 1998.

‘Dance Education’をキーワードとして探すと必ず登場する本書は、舞踊の本質が極めて的確に語り尽くされているがゆえに、この分野のバイブル的書物といえる<sup>1)</sup>。米国において舞踊の教育的価値を説き、その地位向上に尽力した著者の本書については今さら紹介するまでもないが、その舞踊理念は初版から60年近く経った現在においてもなお、教育として、芸術として舞踊を学び研究する者の礎となっている<sup>2)</sup>。今回の版にはH'Doublerの理念の後継者ともいべき、ウイスコンシン大学のBrennan教授が賛辞を添えている。



### (2) 現代アメリカにおける舞踊教育の意義

H'Doublerの著が舞踊教育の普遍的価値を示す書なら、今年1999年5月に上梓されたJudith Lynne Hanna, *Partnering Dance and Education: Intelligent Moves for Changing*, 255p., Champaign USA., Human



Kinetics, 1999. は、その普遍性に現代という時代性をクロスさせ、舞踊教育がこの時代においていかに意義深いものであるかを論じている。文化人類学的考察を専門とする著者がカバーしている問題は広く、パート1は舞踊とは何かを問うことから、舞踊教育の潜在的価値、米国における舞踊教育の現状とその周辺、どこで誰が舞踊を指導すべきかに至るまでを、数多くの学術的および公的資料をもとに述べている。さらにパート2は‘Learning in, about, through Dance’と題され、舞踊そのもの、舞踊の周辺、舞踊を通してみえてくる問題についてより具体的なケース(たとえば、舞踊教育とジェンダー、ストレスの問題等)を挙げ、各々において舞踊教育が果たす役割を考察している。またまとめとして、現在舞踊教育が抱えている課題を提示し、この先教育の中で舞踊がどのように機能していくべきかを論じている。巻末に、各々の章の論点を列挙すると共に、全米における舞踊教育の指導基準、舞踊教育関連の組織や資格・研究について豊富な資料が附されている。

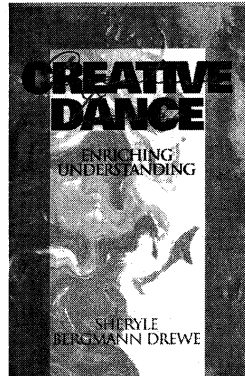
### (3) ‘クリエイティブ・ダンス’の教育的価値

これまでの著書では‘Dance Education’の‘Dance’の内容が特定されていた訳ではないが、次に紹介する書の著者は、教育における舞踊の内容を‘Creative Dance’と明記し、その価値について論じている。

Sheryle Bergmann Drewe, *Creative Dance: Enriching*

Understanding, 139p.,  
Calgary, Alberta, Canada,  
Detselig Enterprises Ltd.,  
1996.

子ども(学生)には、  
教育カリキュラムの中で  
自由に自分を表現する機  
会が保証されるべきだが、  
その機会の多くは絵を描  
いたり文章を書いたりする  
ことが中心で、自身の  
身体で自分を表現する  
ダンスを他の教科と対等  
に実施している学校は  
極めて少ない。本書は  
このような状況を踏まえ、  
なぜクリエイティブ・  
ダンスが教育としてふさ  
わしいのかを多様な視点  
—たとえば主体と客体の  
関係、イメージーション  
と創造性等—から、多  
くの引用を交えて論じて  
いる。とくにクリエイ  
ティブ・ダンスの審美的  
性質が、ユニークな視点  
を持って人間の経験を理  
解する力を育てるとい  
う点を強調し、決まった  
形式を持つ他のどの  
ダンスよりも、クリエイ  
ティブ・ダンスが教育的  
価値に富むと主張して  
いる。著者はカナダ  
マニトバ大学の体育・  
レクリエーション学科  
助教授であり、ダンス  
の実技指導の他に哲学  
のコースでも表現的  
芸術等の講義をして  
いる。そのためか、  
本書では思索に富む  
論の展開が際立って  
いる。



## 2. 舞踊教育の実践—現場で役立つ指導書

1. では、教育における舞踊の価値と意義を論じた書を中心に見てきた。そこで次に、その実践の手がかりとなるであろう書物を以下に2つ紹介したい。

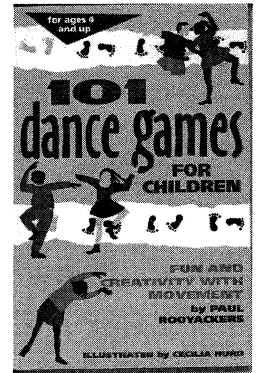
### (1) 導入としてのダンスゲーム

Paul Rooyackers, 101 Dance Games For Children: Fun and Creativity with Movement, 146p., California, a Hunter House Smart Fun book, 1996.

本書は指導的立場にある親、保育者、学校の教師、地域の指導者といった人々を対象に書かれた、

いわばダンスゲームのマニュアル本である。パート1に「なぜダンスか?」「ダンスをすることの意義は?」という問いに対する著者の考えが簡潔に述べられており、パート2に紹介される141種類のゲーム(タイトルは101

だが)が、筆者の明確な理念のもとに創出されたものであることを示唆している。パート2は11のセクションから構成され、「紹介(Introduction Dances)」「手(Hand Dancing)」「出会い(Meeting Dances)」「協力(Cooperation Dances)」「集中力(Concentration Dances)」等、各目的に応じたダンスゲームが紹介されている。国民性の違いで少々取っつきにくいと思われるゲームもあるが、アレンジしてやってみると、いずれも参加する者の個性を引き出し、いつの間にか想像力・集中力・観察力を十分に発揮できる様に工夫されていることがわかる。最初の頁に一覧があり、各々のゲームについて適切とされる対象年齢、人数、場所の広さ、音楽等が示されている。

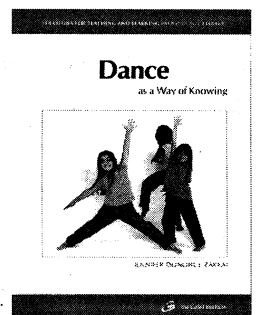


### (2) 想像と創造の拡がりを目指す授業

Jennifer Donohue Zakkai,  
Dance as a way of  
knowing, 152p.,  
California, The Galef  
Institute, 1997.

本書は、'Strategies for Teaching and Learning Professional Library' という

シリーズの中の1冊である。教師は皆、ダンスの特別な動きの技術を持たずとも、今知っている日常の動きから豊かな創造の世界へ子ども達を導くことが可能であるという考えのもとに、著者は本書を'workshop on paper' と称し、授業の組



み立て方、進め方、取り上げるテーマ、動きの内容等を詳細にわたり提案している。また各章に2～3ヶ所ずつポイントとなる質問を配し<sup>3)</sup>、それに答えることによって、読者の問題意識が明確になる様に工夫されている。テーマに即した参考文献の紹介や現場の指導者の声も多く収められており、一つのテーマを理論と実践の両面から深めている。本書は幼稚園および小学校の教師を対象に書かれた指導書であり、ダンスというよりムーブメントの探究に近い内容だが、授業を展開していく際のひとつの基本的なモデルを示しており、子どもの創造性の陶冶に目的をおいたその緻密な内容が非常に興味深い。

### 3. 専門教育としての舞踊

1. で挙げた3つの著書はいずれも、舞踊の持つ教育的価値が学校教育のカリキュラムの中でどのように活かされるべきかを論じていた。次に紹介する書は、舞踊学校や稽古場という舞踊を専門に学ぶ場において、舞踊がどのように教授されるべきかという視点から書かれている。

Maria Fay, *Mind over Body: The development of the dancer-the role of the teacher*, 199p., London, A&C Black, 1997.

本書は、1992年～1996年にイギリスの‘The Dancing Times’に掲載された著者の文章を1冊にまとめたものである。長年、ヨーロッパや北アメリカの舞踊学校、バレエ団で教師として多くのダンサーを指導してきた著者は、ダンス（とくにバレエ）をよりプロフェッショナルに学ぶ人、あるいはその家族、そして指導者のために本書をまとめたという。彼女はまず、多くの舞踊学校や稽古場において、本来楽しみや喜びであるはずのダン

スの練習が単なる技術習得のためのトレーニングになってしまっていることを憂慮している。他の芸術形式や運動形式と異なり、ダンスは自分自身の身体を素材に自己の表現を生み出してゆくものであるため、ダンサーに起こりうる問題は複雑で多岐にわたる。中でもダンサーの精神的、心理的側面に関する問題は見過ごされがちで、親でさえもそれらを見逃し、あるいは無視してしまうことがあるという。このようなことが起こる一因として、著者は正確な知識と情報の不足を挙げている。さらに、指導者がダンスの技術のみを教えるのではなく、ダンスを通して人格を育てるのだという理念を持って一人一人のダンサーに関わることの大切さを強調している。理論的背景に乏しいのが少々気になるが、指導者としての豊富な経験を活かし、考えうる様々な場面におけるダンサーの心のケアについて数多くの具体的事例を示しながら持論を展開している。

おわりに

近年は情報網の発達のお陰で、海外の出版事情もリアルタイムで入手できるようになった。それを見ると毎年、アメリカとイギリスだけでも、舞踊関連の書物が非常に多く出版されていることに驚く。それだけ両国においては、舞踊の価値を説くことに熱心である。これは、舞踊が人間の重要な文化のひとつとして認知されてきたことの証であろう。

注

(1) よく知られているように、邦訳は松本千代栄訳「舞踊学原論—創造的芸術体験—」であり、1974年に大修館書店より出版されている。

(2) 初版は1940年、F. S. Crofts & Co., Inc. より出版されている。

(3) ‘Dialogue’という形で挿入され、質問に対して答えを記入する対話形式になっている。

(原田 純子)

## 平成10年度 舞踊学関係修士論文題目一覧

修 士 論 文 題 目	氏 名	大 学 院 名
大野一雄『わたしのお母さん』考	相原 朋枝	お茶の水女子大学大学院
コンタクト・インプロヴィゼーションの構造と実際	伊藤真喜子	お茶の水女子大学大学院
「舞踏」の概念に関する研究－暗黒舞踏の言説から－	三枝 彩	お茶の水女子大学大学院
ジャン＝クロード・ガロッタ研究（Jean-Claude Gallotta 1950～）	壽田 裕子	お茶の水女子大学大学院
W. フォーサイス研究－“動き”のシステムと relationship を中心に－	泉水 利枝	お茶の水女子大学大学院
劇場のアートマネジメント研究－舞踊の視点から－	塚原絵梨子	お茶の水女子大学大学院
厚木凡人とその作品－芸術的思考について－	福澤 里絵	お茶の水女子大学大学院
国民文化としての舞踊「ハルクオエンラル」の創造－トルコ共和国におけるカフカス舞踊を例として－	松本奈穂子	お茶の水女子大学大学院
学校教育における地域伝統芸能の実践に関する研究	山下 佳美	お茶の水女子大学大学院
身体表現における感性情報の抽出－印象評価と映像分析－	阪田真己子	神戸大学大学院総合人間科学研究科
舞踊作品鑑賞と脳波変動に関する研究－バレエ作品「海賊」のパ・ド・ドゥについて－	島岡 彰子	筑波大学大学院体育研究科
日本の大学教育におけるダンスカリキュラムに関する研究－ダンスカリキュラムの現状と展望－	志田 真紀	筑波大学大学院体育研究科
アメリカ合衆国の大学における舞踊教育の研究－California Institute of the Arts を事例として－	和光 理奈	筑波大学大学院体育研究科
『黒塚』と『安達ヶ原』	伊佐めぐみ	日本大学大学院芸術学研究科
『稽古場』という療養所－日本舞踊の稽古場に於ける心の癒し－	浦山 佳代	日本大学大学院芸術学研究科
「ジャズダンス」－その歴史と魅力－	岡田 紘未	日本大学大学院芸術学研究科
韓・日両国の舞踊における扇に関する考察	趙 顕静	日本大学大学院芸術学研究科
舞踊表現にみる群舞論の考察－日本舞踊と西洋舞踊の理論と比較－	中澤 志月	日本大学大学院芸術学研究科
舞踊に関する幼少教育と創造性の問題	藤井 香	日本大学大学院芸術学研究科
民俗芸能「エイサー」の特性に関する研究－八村の踊り比較－	高山せい子	琉球大学大学院教育学研究科
ケネス・マクミラン研究－バレエ『マノン』におけるナラティヴィティの構造－	藤井 由乃	早稲田大学大学院文学研究科

（以上、平成11年10月31日までにご回答いただいた該当論文を掲載した。）